

樋堀大師

大字樋堀（旧幸松）。市立東中学校の西方、県道宝珠花線から少し左に入ったところにある。

昔は新義真言宗最勝院の末寺で白雲山正福寺と云う寺があった。現在は当時からの墓地と大師堂がある。正福寺は明治の初期、無住寺であったため廃仏き釈令によって廃寺となり、寺は取りこわされてしまった。その跡地に地元樋堀村の住民たちによって大師堂が建てられて大師信仰が続けられてきた。現在の大師堂は関東大震災後に再建されたものである。

この樋堀の大師についての伝説がある。古老の語り伝えによるとこの正福寺に文政のころ一人の旅僧が、雪舟の筆になる釈迦如来と筆者不明の弘法大師の画像を描いた掛軸二幅を背負って来訪され、この寺に泊り幾日かを過し、旅僧がまた旅に出るためこの寺を去ろうとすると、急に足・腰が痛み立てなくなってしまい止むを得ずとどまり、数日後に再び出発しようとするともたも足腰が思うにまかせなくなった。旅僧は「これは如来様と大師様がこの地にとどまりたいという思召のためではないか」と悟り、この二幅の掛軸を正福寺に残すことにして旅に出ることにしたところ何の異常もなく旅立ちすることが出来たという。

その画像の掛軸はいまも存在している檀家の家に保存されていて、御開帳の日に堂に祀られている。弘法大師の画像は縦七四糎・横三四糎の絹地に描かれている。釈迦如来の画像は縦一三〇糎・横六九糎の絹地に描かれている。掛軸を納めてある箱のふたには文政三辰年（一八二〇）八月朔日調製正福寺と記されている。

毎年四月八日には釈迦如来画像の掛軸をかかげ、また四月二十一日には弘法大師画像の掛軸をかかげて御開帳が行なわれている。

この大師様については古老からの話や本寺の最勝院にも語り伝えられている物語りがある。

樋堀大師は西新井、川崎大師と共に三大師と云われていることについて、首の大師を樋堀、胴の大師を西新井、手足の大師を川崎とされている尊い大師様です。

昔から厄除大師として多くの参詣人を集めていたと云い伝えられているそうである。

今も大師堂に樋堀村の村民が奉納して鰐口がある。直径三六糎の小形なものであるが、「厄除弘法大師当村中 嘉永六癸丑年（一八五三）九月吉祥日 武州樋堀村正福寺住法印鏡代」の銘が刻まれている。

戦前までは御開帳の日は樋堀地内に屋台、露店、見世物小屋等が出て大変な賑いであったと云われている。

現在は樋堀の町内会役員等によって御開帳は行なわれているが、昔の賑いは全くなく当日導師を迎えて後
ささやかな直会が行なわれるだけとなって、あまり世に知られなくなってしまった。

※春日部市粕壁東三・二・十九

粕壁小学校第三校舎内

市史編さん室

(電話⑥六四四二番) ※1

初出「広報かすかべ 昭和五十五年十二月」かすかべの歴史余話

※1 掲載当時のまま作成しました。市史編さん室は、春日部市教育センターで活動しております。(平成二
十八年十月現在)

